

# 不破高校朝読通信 第11号

平成25年8月26日(月)

発行 岐阜県立不破高等学校図書部

クラス別・個人別 図書貸出冊数 ベスト1 ベスト2

月	種 類	ベスト1	ベスト2
6月	総合貸出冊数	3年3組	1年4組
	朝読書用学級文庫貸出冊数	3年3組	1年1組
	個人貸出冊数	3年3組	1年4組

紹介する本

題 『博士の愛した数式』 著 者 おがわ ようこ 小川 洋子  
発行者 佐藤 隆信 発行所 (株) 新潮社  
発 行 平成17年12月1日 発行  
平成19年6月5日 27刷  
定 価 478円 図書館にあり

数学科教諭 臼井 澄人

以前『博士の愛した数式』という映画を見て、その影響から、新潮文庫、小川洋子著の『博士の愛した数式』を読んだ。

老数学者、家政婦の「私」とその10歳の息子の3点が、数学と阪神タイガースという2色の紐ひもで結ばれ三角形をなしている。独創的な構図である。

[ぼくの記憶は80分しかもたない] 老数学者(博士)の背広そでの袖には、そう書かれた古びたメモが留められていた。記憶力を失った博士にとって、私は常に“新しい”家政婦。博士は“初対面”の私に、靴のサイズや誕生日を尋ねた。数字が博士の言葉だった。やがて私の10歳の息子(ルート)が加わり、ぎこちない日々は驚きと喜びに満ちたものになった。

そうして読み始めると、繊細な仕掛けせんさいが張り巡らされている。例えば、息子ルートけがの怪我を見てショック状態の博士を元気付ける場面である。「『心配いりません。ルートは生きていますよ。ほら、この通り。ちゃんと息をしています。』そう声を掛けながら私は博士の背中なを撫でた。思いがけず、広い背中だった。」最後の一文が光る。

またこんな場面もある。「『1-1=0 美しいと思わないかい?』博士はこちらを向いた。一段と大きな雷鳴とどろが轟き、地響きとどろがした。母屋の明かりが点滅し、一瞬何も見えなくなった。私は彼の背広の袖口を握りしめた。」

たった数文だけで、博士の身の回りの世話をしながら、その人間性を知り、数学の美しさに触

れるうちに、いつの間にか「私」の心に芽生えた、恋愛とも友情とも違う、家族愛とも敬愛とも少し違う、博士へのほのかな慕情が暗示される。

そしてこの慕情の一方通行でないことが、博士の変化に気付いた、博士とかつて特別な関係にあったと暗示される義姉の、冷たい視線によって暗に裏付けられる。こうして、物語の核ともなるべき要素が、決して明示されないまま、じわじわと読者にしみ入っていく。大胆不敵な、数学的ともいえる構図に、上品で奥ゆかしい文学的暗示がからみついていく。見事な絡み合いである。

これに生の数学が加わって物語を重層化する。「私」の誕生日（2月20日）からくる220と博士の腕時計の裏に刻まれた番号284が友愛数<sup>ゆうあいすう</sup>なのである。すなわち、220の自分以外の約数を全部足すと284になり、逆に284の自分以外の約数を全部足すと220になる。このようなペア、友愛数はきわめて稀<sup>まれ</sup>であることから、博士と「私」の間の特別な関係が示唆される。

博士は、息子ルートに初めて会った時、ルートの頭を撫でながらこう言う。「君はルートだよ。どんな数字でも嫌がらず自分の中にかくまってやる、実に寛大な記号だ。」こうしてルートの庇護者<sup>ひごしや</sup>としての博士が示唆される。

家政婦である「私」<sup>ようぼう</sup>の容貌は30前の子持ちというだけで描写されていないが、「君の利口な瞳<sup>ひとみ</sup>を見開きなさい」という博士の言葉や、素数だと思った341が11で割り切れてしまうことを見つけた瞬間の「まあ、何ということ」というつぶやきなどに愛らしさが暗示されている。

くっきりした輪郭に、ぼんやりした暗示が縦横に張り巡らされていて、墨絵のような静謐<sup>せいひつ</sup>を醸し出している。ところがそこで物語は終わらない。ドンチャカチャンの阪神タイガースが加わる。このおかげで三角形はいよいよ強固なものとなる。3人が野球カードに熱中したり、タイガースの試合見物に行く所などは、深刻になりかねないこの物語に、またとないユーモアを与えている。タイガースへの熱狂というユーモアが、墨絵に色彩を加え油絵に変えている。

しかもここで、中心人物である不世出<sup>ふせいしゅつ</sup>の江夏投手が、何と数学的に結びつくというウルトラウルトラCがでる。江夏の背番号28が完全数なのである。すなわち28の自分以外の約数を全部足すと28になるのである。こんな数はめったにない。この奇跡により、3人と数学、阪神タイガースという主役達が一気に結びつくのである。

この作品には、著者小川さんの数学への憧憬<sup>どうけい</sup>、数学美への心酔がちりばめられている。この物語では、数学への愛と博士への慕情がないまぜとなり膨らんでいく。男性としての魅力に決定的に欠ける博士への慕情は、「私」の数学美への強烈な心酔があってはじめて成立するといえる。

この心酔によるものであろう、私達数学者にとってごく当然と思われている事柄に、小川さんならではの文学的照明を投げかける所など、教えられることが度々だった。

小川さんはこの作品で、数学と文学を結婚させた。記憶をなくし、身の回りのことも自らできない、哀れとも形容できる老博士が、実はとても幸せだった、と読後にしみじみと思えてくるのは、この結婚が幸せなものだったということでもある。